長崎大学
ISSN 1347-7994

CHOHO

Vol.10
長崎大学広報誌【長報:チョーホー】
2005年1月(年4回発行)
Winter

【特集】
現代版「赤ひげ」を育てる
研究と教育の新しいフィールド
しまへ。

国際医療協力
国境を越えて支えあう命

【表紙】について

「華」　喜多島　由佳

長崎大学教育学部
情報文化教育課程芸術文化コース（美術）3年

「テーマは、華＝花。紙を花の形に切り抜き、折り目をつけて、立体的な柔らかさが出るようにしました。同じ花はひとつもありません」という作者。花々はグラデーションになるように配置。余白部分に置いた白い花と色鮮やかな花がお互いに引き立てあっています。「大変な作業でしたが、花の柔らかさ、美しさ、そして華やかさを私なりに表現しました」。どこか日本的な情緒と美しさも感じとれる作品です。

COLUMN

【学長コラム】

留学生と友達になろう

長崎大学長 齋藤 寛

昨年十二月五日、シェイク・アシフ・アハメド君の結婚披露宴に出席しました。彼は長崎大学大学院生産科学研究科博士後期課程二年在学中のパキスタンからの留学生です。九月にパキスタンでメヘウィシさんと結婚しました。長崎の友人たちが会費制の結婚披露宴を計画したのです。ビザの関係で花嫁の来日が遅れ、アシフ君は大変心配したようですが、披露宴の前日無事に来崎できたのは何よりでした。

披露宴には六十人もの出席者があり、とても楽しい会でした。挨拶を頼まれて私は「アシフ君は物価の高い日本で勉強する外国人留学生であり、生活は苦しいだろうが、若いときは誰でもお金がなくて当たり前。メヘウィシさんのようなすてきな人と結婚できて、そして大学で勉強に専念できるなんて、これ以上の幸せはないと思う、頑張ってほしい、私たちも応援します」と述べました。二人は「We think so」と大きく頷いてくれました。

アシフ君が日頃からお世話になっていて日本のお父さんお母さんと呼んでいる山下眞教・美砂子さんご夫妻が、宴の終わりに親代わりとなって挨拶をされました。「アシフ、メヘウィシの二人をよろしく」と話されたとき、万感胸にこみ上げたのでしょう、言葉が出なくなってしまいました。

これほどまでに愛してくださる人を持つアシフ君の人柄を思い、また山下さんご夫妻のように留学生を支援して下さる市民が大勢おられることに私は感激しています。

長崎大学の留学生は十五年前には三十人でしたが、その後どんどん増加し、昨年十二月ついに三百人を超えました。近い将来四百人になると予想されます。留学生諸君はみな前向きで、頑張りやです。

高校生の皆さん、長崎大学で勉強して、留学生諸君と友達になってください。一月十五、十六日の大学入試センター試験がんばって下さい。二月二十五日、三月十二日は長崎大学の入試です。皆さんの四月の入学を待っています。

追伸：学長メッセージ（http://www.nagasaki-u.ac.jp/）にもアクセスしてご意見をください。
メールアドレス：president@ml.nagasaki-u.ac.jp 必ずお返事します。

HIROSHI SAITO

CONTENTS

P01 【特集】現代版「赤ひげ」を育てる 研究と教育の新しいフィールド しまへ。
P06 【古写真・昭和ルネサンス】長崎大波止電車通り
P07 【国際医療協力】国境を越えて支えあう命
P12 【たかが食事されど食事】教育の原点は食にあり
P13 【We Love Circle】よさこい部 突風
P14 【長崎大学教育学部附属幼稚園】生きる力の基礎を育む 【留学生のお国自慢】タイ
P16 【いいたか放題】（株）ゆびとま 代表取締役社長 小久保徳子さん
P17 【インフォメーション】・【編集後記】

◎本誌記事を長崎大学関係者が転載する場合は、「長崎大学広報誌CHOHO○号から」と明記してください。学外の方は、事前に広報企画委員会までご連絡願います。

現代版「赤ひげ」を育てる
研究と教育の新しいフィールド
しまへ。

昨年五月、長崎県五島市の五島中央病院内に、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の「離島医療研究所」が開設されました。この研究所は、しまの医療の充実をめざす長崎県と五島市の寄付によってできた「離島・へき地医療学講座」の活動拠点としてつくられたもので、医学教育や離島医療についての調査・研究を行います。

「離島・へき地医療学講座」は、離島・へき地における社会構造や医療体制などに精通した離島・へき地医療の専門家を育成する教育システムの研究開発や、地域のニーズにあった医療を展開するための基盤研究などを行います。こうした活動を通して、地域医療の向上に寄与し、ひいては地域の活性化に貢献することを目的としています。

その活動の一貫として、現代版「赤ひげ」医師を育てることを目的とした『地域と連携した実践型医学教育プログラム』にもとづく離島医療・保健実習も、離島医療研究所が主体となって行っています。このカリキュラムは、長崎大学初の取り組みで、文部科学省が企画した平成十六年度の※「特色ある大学教育支援プログラム（GP）」にも採択され、全国的に注目されています。

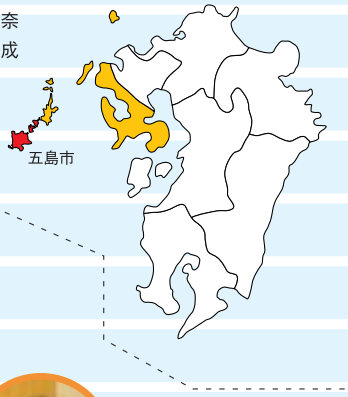
これらの活動について「離島医療研究所」所長の前田隆浩教授に伺いました。

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
離島・へき地医療学講座
離島医療研究所所長
前田隆浩 教授
Takahiro Maeda

※「特色ある大学教育支援プログラム（GP）」／平成十六年度の応募数は五三四件で、選定件数は五十八件。このうち医学部のプログラムは「主として大学と地域・社会との連携の工夫改善に関するテーマ」に応募して採択された。

長崎県五島市

九州の最西端に位置する五島市は、長崎港から西方海上約100kmのところにある五島列島の南西部で、福江島、奈留島、久賀島、椛島など11の有人島と52の無人島から構成される。



五島保健所

岡本直紀 所長

五島市社会福祉協議会福江支所（総合福祉保健センター内）

西澤保二 会長

五島市健康政策課・保健センター（総合福祉保健センター内）

吉谷清光 課長

五島中央病院

神田哲郎 病院長

富江病院

寺田馨 病院長

前田教授と離島医療研究所のスタッフ。前列左から
助手の中里未央さん、学生担当の中嶋秀治さん、川上和美さん。

現代版の赤ひげのイメージとは

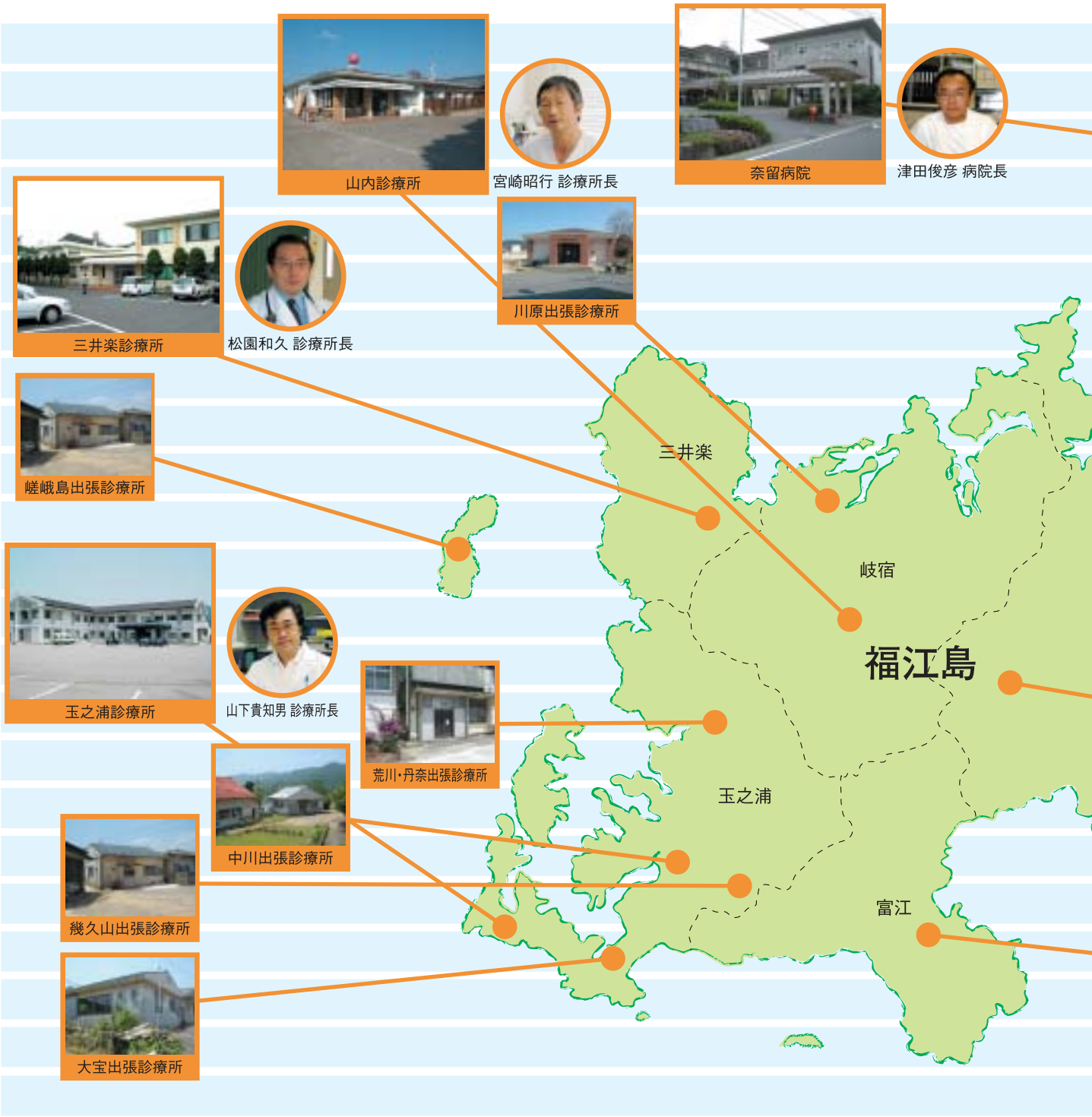
現代版「赤ひげ」医師を育てることを目的に、昨年秋からはじまった長崎大学医学部医学科の離島医療・保健実習は、総合診療科、公衆衛生学教室、離島医療研究所が担当し、五年生が全員参加する必修カリキュラムです。

俗に言う「赤ひげ」は、山本周五郎の『赤ひげ診療譚』という小説に登場する医者で、人情味もテクニックもある医者の代名詞です。「私たちが目標とする医師像は、病める人と良好なコミュニケーションをとることができ、病気を診るだけでなく、患者さんの心や生活環境なども洞察する、いわば全人的医療ができる医師です」。それは、まさに赤ひげのような医師ですが、現代版の赤ひげは、それだけではありません。「従来の赤ひげは、患者さんの診断と治療、そしてその後のケアまでをひとりでこなしていますが、今の時代は、チーム医療が主体です。ですから、優れた診療テクニックを持って全人的医療を実践することに加え、現代医療の三本柱である『保健』、『医療』、『福祉』を把握し、相互間のコミュニケーションをスムーズにとれる医師が、現代版の赤ひげと言えます」。

※ここでいう「保健」は、健康増進や疾病予防など病気にならないための取り組み。「医療」は、病気を診断して、治療すること。そして「福祉」は、自立と社会復帰をめざした取り組みを指す。

地域医療を学ぶにふさわしい五島

この地域医療実習は五島市に所在する五島中央病院を拠点に、富江病院、奈留病院、三井楽



診療所、山内診療所、玉之浦診療所、そして保健実習として五島保健所、五島市健康政策課、五島市社会福祉協議会福江支所などの施設や機関の協力を得て行われます。

「五島市ではコミュニティが比較的小さくシンプルなため、高度な専門医療をやっている五島中央病院を中核にした医療連携をはじめ、『医療』と『保健』と『福祉』の全体を見渡しやすい。実習生たちが地域と連携して総合的な地域医療と保健を学ぶにふさわしい場所なのです」。

今までの医学部の臨床実習では、大規模教育病院を中心に重症疾患や高度な専門医療（珍しい病気）を重視した教育が行われてきました。それも大切なことですが、最近では、プライマリケア（初期治療）や日常よく遭遇する疾患についての臨床教育の必要性が重視され、また、患者さんの置かれている立場や性格、家族構成などまで把握した上でヒトを診る全人的医療について、学生時代から体験することも重要だと言われています。「地域に行けば行くほど暮らしと医療は一体化し、患者さんの生活に入り込んだ医療が日常的に行われています。つまり、離島では全人的医療や地域に根ざした医療を見たり体験できる機会が多いということです」。この地域参加型の医学教育は、決して離島という限られた地域だけでなく、都市部をも含めたどこの地域でも応用可能な医療人育成のモデルになり得ると考えられています。

学生たちは離島実習で何を感じたか

五島をはじめとする県内の離島では、医師不足が依然として続いています。医師の割合は、長崎市は、人口千人あたり四人で全国一ですが、五島市の場合、人口千人あたり一・六人で全国平均を大きく下回っています。なぜ、離島に医師が少ないのか、その理由が実習前にとった学生たちのアンケートによくあらわれているといいます。

「離島の医療レベルは低いのではないかとか、離島でやっていると自分のテクニックが年々落ちるのではないか、あるいは医療について相談できる医師がいないのではないかといったことが気になるようです。生活の面でも日常の利便性、交通の便、子供の教育などに不安を感じるというのが多い」。

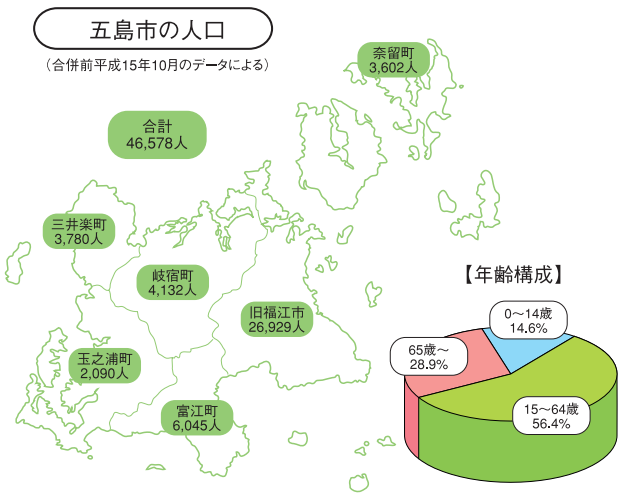
しかし、実習後はそんな離島へのイメージに少し変化が見られるそうです。「まず、五島中央病院のようなレベルの高い診療ができる病院があったのは驚きだったという声がよく聞かれます。そして多くの実習生は、医師と患者さんとのコミュニケーションの深さや、地域に溶け込んで診療をやっている医師の姿などにカルチャーショックを受けるようです」。

たとえば、福江島のほぼ中央にある山内診療所の宮崎先生は、地元の農場で有機農法をやるなど、医療の面だけでない地域との強いつながりがあります。「そういうふうに地域にしっかり腰を据えてやっていらっしゃる医師の方々との出会いには大きなインパクトを受けるようです」。

五島の中のさらに小さな離島へは、渡海船で渡ります。

出張診療に同行して、嵯峨島の港に降り立った実習生。

寄附講座「離島・へき地医療学講座」の開設式で挨拶をする前田教授。通常、地方自治体の寄付による講座の実現は難しく、長崎大学でも初めてのこと。



離島実習でさまざまな体験をした学生たちの中には、実習期間が短いことに不満を感じる人もいました。「つまり学生たちは、テクニックが落ちるどころか、いい研修の場であることを認識し始めている。アンケートにも変化が見られ、《将来、離島に勤務したいと思うか》という設問の答えが、実習前よりも実習後の方が、勤務したいというポジティブな方に若干シフトします。また生活面での不安なイメージも実習前と比べると減っているなど、彼らの意識は確実に変化しています」。

このような実習の効果や意識の変容の調査と解析も大切な医学教育研究のひとつです。「私たちはこの離島医療・保健実習を通して、長崎大学医学部の臨床実習の質を高めることをいちばんに考えなければなりません。こうした実習を通して離島医療に対する興味は当然高まるでしょう。その結果、離島に貢献する医師が育つことが期待できます」。

「国際島嶼（とうしょ）学」として世界へ

すでに動き出している離島医療研究所の研究として、「動脈硬化と生活習慣病」、「成人T細胞白血病」などがあり

診療の現場で、患者さんとの接し方を学びます。

往診先の玄関口で、ちょっと緊張気味の実習生。

学生と一緒に自転車で往診に出る宮崎先生。

五島中央病院での実習風景。

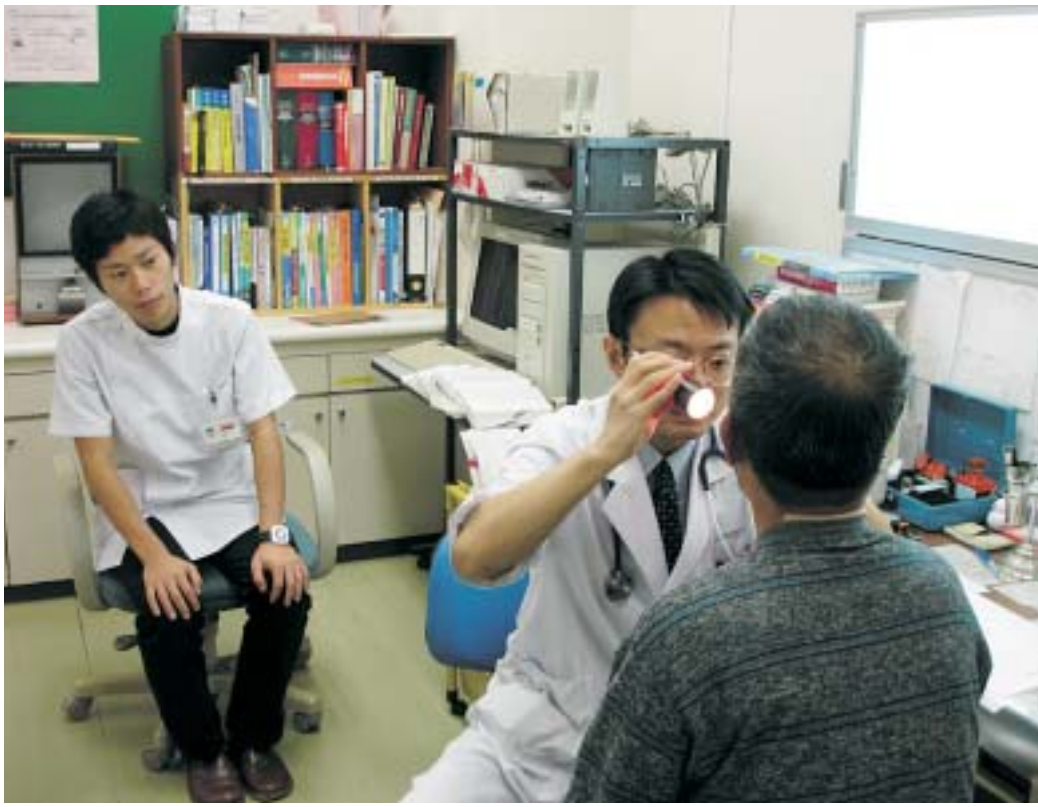
第1回離島医療教育研究会の会議風景。

地域のデイケアセンターで食事の介護の実習。

地域の公民館で定期健診のお手伝い。

長崎大学の新しい試みである離島実習に、マスコミの取材も相次ぎました。

平成16年度は医学部5年生96人を14のグループに分け、1週間ずつ離島実習を行った。


富江病院の寺田病院長の診察の様子を熱心に見学する実習生。

ます。「島嶼地区は、全国平均より高齢化がかなり進行しています。年齢とともに進行する動脈硬化についての研究は、今後ますます少子高齢化が進んでいく日本にとって非常に意義深いことです」。

医学部保健学科においても、来年度から五島で臨床実習をはじめる計画が進んでいます。「今後、歯学部や薬学部も五島での臨床教育に参加する計画があり、また、離島医療研究所との共同研究も計画されています。そうなると、五島は医療人育成の場として、また、離島医療研究の場として、人の往来も増えるでしょうし、地域の活性化にもつながるでしょう。そして研究・教育活動を通して、関係機関の連携も良くなり、医療レベルも上がっていく。それが最終的に医師不足解消につながればと考えています」。

将来的に、離島医療研究所で蓄積した技術やノウハウを「国際島嶼学」という学問までに高めたいと言う前田教授。「多くのしまを抱えているのは何も長崎県だけではありません。東南アジアをはじめ世界の各地にみられます。いつか、私たちが培った「国際島嶼学」をそういった国々に発信し、技術移転などを通して国際貢献ができればと思っています」。

※島嶼…しま。島々。(「嶼」は、小さな島の意)

古写真・昭和ルネサンス ❹

長崎大波止（おおはと）電車通り

環境科学部　若木 太一 教授

大波止から大浦方面へ走って行くチンチン電車である。車体番号五十七号とあるのが読みとれる。この電車が走りはじめた大正十年～十一年頃の写真であろう。「小林廻漕店（こばやしかいそうてん）」「日支聯絡船（にっしれんらくせん）客待合（所）」などの看板がみえており、港の近くである。

この電車は四十型と呼ばれる電車で、四十号から六十一号までであるなかの一台である。大正十年（一九二一）五月二十三日、茂里町車庫の火災で電車十九両が焼失、隣接の民家二十二戸も類焼した。在籍車の半数が失われたので緊急の補充がおこなわれた。この年十二月から翌大正十一年十月までに二十二両が造られた。台車とモータなど電気機器類は米国WH社製、車体は木造で、すべて茂里町車庫で組み立てられた。この四十型電車は原爆で八両が焼失したが、戦後も昭和四十三年まで現役として運転されていたという（長崎電気軌道株式会社編『五十年史』一九六七）。

長崎の路面電車の開通は大正四年（一九二五）十一月十六日、県立長崎病院下（岩川町）～築町間三・六キロであった。第二期は翌大正五年十二月に千馬町（現出島町）～石橋間が開通した。第三期は大正八年十二月、長崎駅前～古町間が開通、翌大正九年十二月に築町～馬町間、同じく浜口町～岩川町間が開通した。そして大正十年四月に築町～思案橋間が開通し、昭和九年（一九三四）諏訪神社前～蛍茶屋間、さらに昭和二十五年（一九五〇）大橋～住吉間、昭和三十五年（一九六〇）に赤迫まで線路が延び、現在みられるような軌道ができた。路面電車は、残念なことに原爆で甚大な被害を受けた。

田川清光さんは昭和二十年（一九四五）八月九日、竹の久保で被爆、すでに浦上駅は火の海だった。ただちに救護活動に出かけた。「電車線路に沿って走っているうちに、井樋の口電停付近（現在の銭座町電停）に、まだ焼けていない電車が二台止まっているのに気がついた。（中略）おそい来る火の粉をふり払い、ふり払い、無我夢中で走った。そしてやっと稲佐橋の電車停留所までたどりついた」と体験を記している（『炎の中から―被爆衛生兵の証言』一九七一）。まもなく電車も燃えてしまったという。

この写真の五十七号は右の文章の中の一台で、この日焼失した。

■長崎大波止電車通り
所蔵：長崎大学附属図書館　形状：絵はがき写真　サイズ：縦9.1cm×横14.1cm（モノクロ）

～長崎電気軌道株式会社編『五十年史』（1967年）より～
昭和41年（1966）の電車運転系統図。懐かしい電停の名称が見受けられる。現在も続く100円運賃（小人50円）は、昭和59年（1984）から。経営努力の賜物である。

◆◆◆ 国際医療協力 ◆◆◆

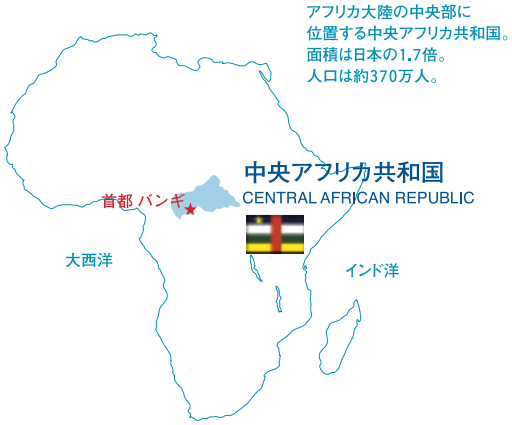
国境を越えて支えあう命

～中央アフリカ共和国、ウズベキスタンでの活動～

徳永先生は現場主義の人。アフリカの途上国で、長い間、医療活動に従事してきました。長崎大学で教鞭（きょうべん）をとるため帰国したのは二年前のこと。「アフリカではときどきマラリアにかかるのですが、若い頃のようにパッと回復しない。体力の限界を感じはじめた頃、日本で自分の経験を学生たちに伝え、あとに続く人がひとりでも増えてくれたらいいなと思ったのです」。現在は、教育の現場を通して途上国を支援しています。

今回は、国際的な医療支援について、また中央アフリカ共和国に自ら開いた診療所の話、そして、ウズベキスタンの看護教育を支援する国際協力機構（ＪＩＣＡ）※のプロジェクトなどについて語っていただきました。

※国際協力機構（ＪＩＣＡ）
発展途上国に対する政府開発援助（ＯＤＡ）の実施機関。ＪＩＣＡは、「Japan International Cooperation Agency」の略。



途上国の貧しさの上に成り立つ先進国

今、世界にあるおよそ一九〇の国の内、四分の三の約一五〇もの国が開発途上国（以下、「途上国」）と言われています。そこには、貧困からくる飢えや病気に苦しむ人々が大勢います。日本は石油や木材などの原材料や多くの食料などを途上国から輸入していますが、私たちの豊かな暮らしが、彼らの貧しさの上に成り立っていることを忘れてはならないでしょう。

少し前までは、途上国は怖い、汚いというイメージだけで語られがちでしたが、最近ではその国で、何らかの支援活動に参加したいという日本の若者が増えてきました。時代の変化でしょう。彼らの意識から国境が取り払われているのを強く感じます。

1. 中尾優子先生（看護学専攻の講師）の指導のもと、アフリカで初めて赤ちゃんをとり上げた長崎大学の学生、永富由起子さん。ホッとして満面の笑み。
2. 姉（右端）が診療所に連れてきた妹たちは栄養失調で表情がない。
3. 首都バンギに徳永先生が開いた診療所。エイズ患者のための診療所で、支援金で成り立っているため患者が支払う診療代はすべて無料。
4. 延々と続く地平線と1本の道。サバンナは徳永先生の大好きな風景だ。
5. 主食のキャッサバを練っているお母さん。

途上国での活動を望む学生のために

私の専門である「国際保健」は、保健師、助産師、看護師をめざす学生の中で、将来、途上国で医療活動をやってみたいという人たちのニーズに応えるものです。途上国の現状をはじめ「地域保健」や「公衆衛生」など現地で役立つ基礎的なことを教えています。

この科目の大きなポイントは、途上国の「貧困」を学生たちに理解させることです。私はアフリカに、エイズ患者のための診療所を開いていますが、そこでも貧困からくる悲痛なエピソードは絶えません。たとえば、エイズ患者が自分の薬を他人に売り、お金を得ようとする行為はよくあることです。また、水が汚いことから感染症にかかる人が多いのですが、水を煮沸するための薪を買うより、診療所で薬を買って飲む方が安くつくので、たいていの人々は汚い水を飲み続けているのです。

正しい知識の普及が大切

「国際保健」のもうひとつの大切なポ

イントに、「正しい知識の普及」があります。たとえば、現地では新生児破傷風が多く、これにかかると赤ちゃんは、まず助かりません。この病について私たちが最初にやるべきことは、破傷風が起きる原因を調べることです。この場合、赤ちゃんが生まれた時にヘソの緒を不衛生なハサミで切っていたことが原因でした。しかも、ヘソの近くで切っていたためバイ菌が入りやすかったのです。そこで、私たちは火で焼いたハサミを使用することや、胎盤に近いところでヘソの緒を切るよう現地の人々に教えます。このような知識を地道に広めていく方がより効果的なのです。

学生たちとアフリカの診療所へ

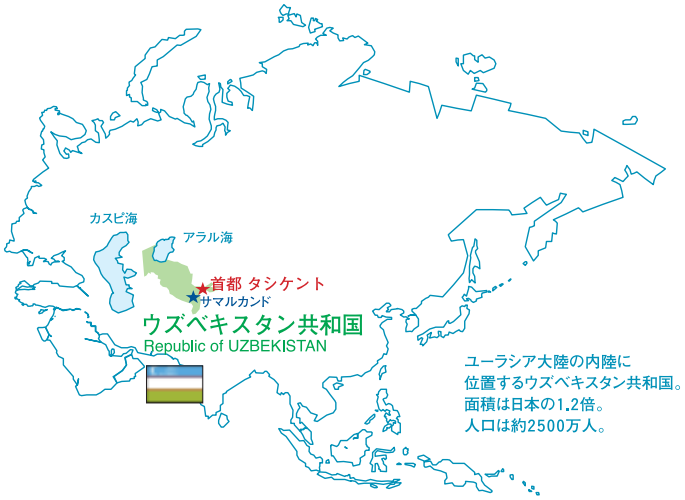
百聞は一見にしかず、ということで希望者を募り、数人の学生たちをアフリカの診療所へ連れていきました。私は教育で大切なのは、チャンスを与えることだと思っています。これもそのひとつ。夏休みを利用しての短い日程ですが、全員かけがえのない体験をしたと思います。

診療所には、エイズ患者診療に付随して、産院や妊婦検診をしたり栄養失調児を診る母子保健センターなども設けています。また、エイズ患者の家庭訪問や地域を巡回してのエイズ予防の啓発活動も行っています。学生たちは、その中から自分の研修テーマに応じた活動を選び自由に見学・体験をしました。

現地では、貧困で食事もできない人々や不衛生な場所に横たわるエイズ患者など、今にも死にそうな人たちをたくさん目にします。学生たちは大きなショックを受け、毎夜の反省会では「過酷すぎる」「かわいそう」というナーバスな声が聞かれますが、翌日には、現実を前向きに受け止めて、ときには日本との違いを面白がりながら、のびのびと活動するたくましい姿を見せてくれました。

アフリカの診療所では、出会った患者に自分ができる精一杯のことをやるだけ。そして疲れ果てて寝て、また朝がやってくる。とてもシンプルな毎日です。問題は山積していますが、人々は明るくとても優しい。みんな私たちの医療支援に大きな期待を寄せ、心から必要としています。私は、そんな彼らに励まされ、支えられ、助けてもらっていると思っています。私が長年アフリカで医療活動を続けていたのは、使命感も確かにありますが、それよりもアフリカの人々と一緒にいることが、理屈抜きで楽しかったからなのです。

6. 現地住民の住まいを訪れる長崎大学の学生たち。
7. マンゴーの木は植民地時代の名残り。エイズ予防の啓発活動の場に丁度いい。
8. 子供たちは紙芝居やビデオなどを食い入るように見つめる。
9. 現地では「マダム」と呼ばれ親しまれている徳永先生。気にかけていた子供と久しぶりに会って大喜び。
10. お母さんはお産したばかり。赤ちゃんの姉と兄が面会に。
11. 診療所の炊き出しの仕事をする栄養失調児のお母さんたち。患者の自立のため洋裁教室もある。現場のニーズに応えながら診療所の活動の幅が広がっている。
12. 雨季直前に咲く花。徳永先生たちは「アフリカの桜」と呼んでいる。



ХАМКОРЛИКНИНГ УЗУЗАМАС РИШТАЛАРИ
НАЗАРИЯ ВА АМАЛИЕТНИНГ БИРЛИГИ
JICA

1. 「看護教育改善プロジェクト」の活動の様子を伝える現地の新聞。
2. ウズベキスタン伝統の金細工の花嫁帽を記念にいただいて。
3. 講演先のウズベキスタンの救急病院の看護師さんたちと。
4. 古都サマルカンドの街角。
5. レギスタン広場。建造物はユネスコの世界遺産。
6. 主食のパン。少ししょっぱくてフワフワしておいしい。

ウズベキスタンへ新しい看護教育を

昨年、私は国際協力機構（JICA）の「ウズベキスタン国看護教育改善プロジェクト」のメンバーのひとりとして、ウズベキスタンへ行ってきました。

このプロジェクトは、国際的な看護の潮流である「client-oriented nursing」（利用者に寄り添う看護）の原則に基づく看護教育を、ウズベキスタンに導入することを目的としたもので、日本から私たち専門家を派遣したり、研修生を受け入れるなどしながら看護教育の改革を進めていくものです。昨年七月から二〇〇九年六月までの五カ年計画で実施されます。

中央アジアに位置するウズベキスタンは、アジアとヨーロッパを結ぶかつてのシルクロード沿いに位置し、交易の中心地として繁栄した歴史があります。ソビエト連邦に併合されていた時代を経て、一九九一年、共和国として独立宣言をしています。現在のウズベキスタンは、安定性の高い社会体制が築かれている一方で、旧共産党時代の組織や機構が今も存続し、依然大きな勢力を持っています。また独立後の財政難もあるなど、民主国家としての発展はまさにこれからという国です。

看護教育を通して深めたい友好の絆

今回は、このプロジェクトの最初の段階の交

流として、現地視察や講演・講義を行ってきました。

ウズベキスタンの看護の現状は、日本と比べるとかなり立ち後れていると言わざるを得ません。「看護師」は、あくまでも医師の補助者として位置付けられており、手術の介助や注射をすることはあっても、患者に話しかけたり、散歩に連れていったり、身体を拭いてあげるなどの看護を、自らの判断で行う状態ではありません。これでは手術は上手くいっても、看護の未熟で術後の経過に悪影響を及ぼすこともあるでしょう。医療の中における看護の力はたいへん大きいのです。

しかし、ウズベキスタンの医療関係者に、この新しい看護の概念がすぐに受け入れられるはずがありません。やはり地道な教育活動が必要だと感じました。

私たちは約三週間の日程を無事に終え八月下旬に帰国しました。

十月には、ウズベキスタンから日本の病院や看護教育の現場を見学するために研修生が訪れ、長崎大学医学部・歯学部附属病院や保健学科の実習の見学にも見えました。

このプロジェクトは、まだはじまったばかりです。これから交流を重ね、プロジェクトが順調に進むと同時に、看護教育を通して両国の友好の絆が深まることが期待されます。

徳永瑞子 教授　長崎大学医学部保健学科

Mizuko Tokunaga

福岡県生まれ。看護師、助産師。1971年、九州大学医学部附属助産婦学校を卒業後、アフリカのザイール共和国（現コンゴ民主共和国）へ渡り、以来1983年までの間に計8年間現地の医療活動に従事。1976年、ベルギー・レオポルド王熱帯医学校で熱帯医学を修める。1985年、エチオピアの干ばつ被災民救援活動に参加。1991年、エイズ対策に取り組むためのNGO「アフリカ友の会」を設立、1993年、その活動の拠点となる診療所を中央アフリカ共和国で開業し、診療と感染予防、エイズ孤児救済などに取り組む。2002年、第14回毎日国際交流賞を個人受賞。2004年12月、第11回中田厚仁記念基金褒賞金受賞。2003年4月から現職。担当科目は国際保健。

～途上国での医療活動を記した徳永教授の著書～

「エチオピア日記」（海声社）：エチオピアの干ばつ難民救済キャンプで過ごした怒濤の日々。初めてアフリカで医療活動をした時の話もおさめられている。

「プサ　マカシ」（読売新聞社）：現地語で「強く力みなさい」の意味。アフリカで助産婦として奮闘する姿が記されたこの本は、90年、読売の「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞を受賞（テレビドラマ化された）。この賞金でNGO「アフリカ友の会」を設立。

「シンギラ　ミンギ」（サンパウロ）：現地語で「ありがとう」の意味。中央アフリカ共和国でエイズ患者とともに生きた日々が胸を打つ。

9

7

8

10

12

11

7. 賑やかな街のバザール。
8. ウリやスイカの山が目立った。
9. 日本から寄贈された看護教育機材で実習が行われている。
10. 保健学科の演習を熱心に見学するウズベキスタンの研修生。
11. 原爆後障害医療研究施設を見学し、被爆者の講話を聞いた研修生。平和公園や原爆資料館も訪れた。
12. 研修の合間に長崎港沖の高島へ。ウズベキスタンは海がない国。今回、初めて船に乗った研修生もいた。

たかが食事されど食事 第3回 「教育の原点は食にあり」

教育の原点は、食べることを通して
自己保存できる知恵を学ぶこと。
ルソー

教育学部教授　玉利　正人
Masato Tamari
専門分野:農芸化学、食品栄養生化学

◆世界の人口の推移

国連人口基金は2004年版「世界人口白書」を発表し、世界の人口が63億7千7百60万人に達し、昨年より7千6百10万人増加し、この80%以上は開発途上国であると報告しました。さらに、白書では2050年には世界の人口が89億人に増加し、日本の人口は今年の1億2千7百80万人から1億9百70万人に減少すると予測しています。

このまま、人口増加と食糧を含めた大量の資源消費の増大及び水資源の枯渇などによる砂漠化が進むと、2025年頃には食糧難が深刻化すると予測されています。

◆主要先進国の食料自給自足率（※図1参照）

世界では多くの人が飢餓で死亡している一方で、人口の増加に歯止めがかかっていません。生きるための基本である食糧生産の現況を、主要先進国における食料自給自足率から考えてみましょう。供給熱量（カロリー）から自給率の推移（1970年と2000年）を見ると、フランスが100%から135%に、ドイツが70%から105%に、イギリスが45%から75%に、スイスが45%から65%にいずれも上昇しているのに対し、日本は60%から40%に減少しており、輸入に大きく依存していることがわかります。日本の食糧政策の貧弱さを垣間見る思いがします。

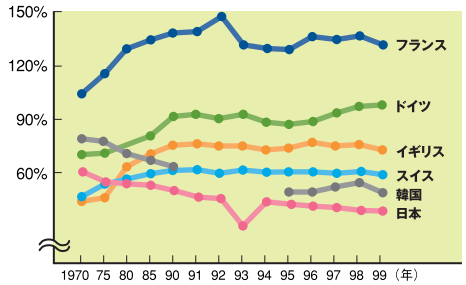
◆食べ残しと廃棄を減らすことも大切

輸入食糧に大きく依存している日本は、食べ残しも多いという矛盾を抱えています。平成15年の一人1日当たり食品使用量は1,117g、食品ロス量は56gで、ロス率は5.0%となり、1年で約20kgも食品ロスがあります。世界には食糧難による飢餓（8億4千万人）で多数の人が死亡しており、一人ひとりが食べ残しの出ない食生活の見直しをすることも大事なのです。参考までに日本の地域別の食品ロス率を表1に示しました。

◆食育のすすめ

ルソーは「教育の原点は、食べることを通して自己保存できる知恵を学ぶこと」と食事の大切さを200年前に述べています。日本政府は食育基本法の今年中の制定をめざしています。これは知育、徳育、体育の教育の三本柱に食育を加え、人口、食糧、心身の健康、社会、学校、家庭などにおける今日的課題に、食育を通して取り組まなければならない時期が来たと判断したためです。

【図1】



■ 主要先進諸国の供給熱量自給率の推移

◎ 資料:農林水産省「食料自給表」、FAO「Food Balance Sheet」、韓国地方研究所「Korean Food Balance Sheet」

飽食時代の日本の豊かな食生活は、実は60%の食糧が外国からの輸入に依存して成り立っていることを考えると将来が不安である。

【表1】

	廃棄	食べ残し	計
北海道	3.5	1.4	4.9
東北	3.5	1.8	5.2
関東	2.9	1.7	4.6
北陸	2.5	1.2	3.7
東海	3.7	1.8	5.4
近畿	2.7	1.5	4.3
中国・四国	3.3	1.9	5.3
九州	3.1	1.6	4.7
沖縄	3.9	1.1	5.0

■ 日本の地域別食品ロス率

◎農林水産省「食品ロス統計調査」より

食品ロス率の最も高い地域は東海の5.4%であり、最も低いのは北陸の3.7%で、九州は4.7%となっている。

踊る楽しさを伝えたい！

1. 昨年の「YOSAKOIさせぼ祭り」で敢闘賞を受賞！「長崎の春夏秋冬」をテーマに、一年がかりでオリジナルの曲、振り付け、衣装を作って挑みました。

2. 踊りを盛り上げる旗ふりも力いっぱい頑張ってます。

3.4. 昨年7月、熊本の三井グリーンランドで行われた「さのよいファイヤーカーニバル」。

5. 部長の大穂寿裕さん（工学部2年）。よさこい部は昨年急に部員数が増えました。「入学式などで踊ってアピールしたり、地道に勧誘のチラシを配ったりした成果だと思います」とうれしそう。

6. 長崎近郊の町の夏祭りに参加。躍動感あふれる踊りに、場内は大盛り上がり！

7. 三役でポーズ！左から濱田瑞樹さん（副部長・水産学部3年）。大穂さん、寄辺隆徳さん（副部長・工学部2年）。チーム名は、トップをめざそうということで、突風（トップウ）に。

鳴子

踊りに欠かせない鳴子。これを両手に老若男女が乱舞する「よさこい」は、もともと土佐の夏祭りとして、50年ほど前に高知市ではじまったもの。伝統の「正調よさこい」のフレーズを基本に、ヒップホップやジャズなどを取り入れた現代的な踊りのスタイルが確立されると、全国各地に広がりました。

学生時代を謳歌するならやっぱりサークルでしょ。

We Love Circle

長崎大学よさこい部 突風

パワー全開！元気を呼び覚ます「よさこい」

派手やかな衣装を身に付けて、元気に踊りまくる「よさこい」。その魅力に引かれて、よさこい部「突風」に集まったメンバーは、総勢百十三人。全員が一丸となってのパワーあふれる踊りはまさに感動的です。

サークルができたのは二年前。教育学部の講義で、佐世保で活躍する「よさこい」のチームの踊りを見た学生たちが、その熱く激しい踊りに感動したことがきっかけです。

「モットーは、全身を使って表現し、自分と周りが楽しく元気になるように踊ることです」と部長の大穂寿裕さん（工学部二年）。今は仲間を率いる立場ですが、大学に入るまで、「よさこい」のことは全く知らなかったそうです。

「突風」は、学内の各種催しや長崎近郊の町の祭りへ参加する他、小・中学校を訪問し演舞の指導も行っています。昨年は、佐世保市立大久保小学校の子供たちを元気づけようと指導に出向き交流を深めました。「子供たちが笑顔で踊る姿に、逆にこちらが勇気をもらいました」と言う大穂さん。今後は、福祉施設などを訪問し演舞を披露するなど、さらに活動の場を広げていく予定だそうです。

【長崎大学教育学部附属幼稚園】

生きる力の基礎を育む

■附属中学校３年生と園児の交流。お兄さん、お姉さんとのふれあいが心の成長につながります。

■春、文教キャンパスの池はオタマジャクシがいっぱい！毎年園児たちが採取にやってきます。

附属幼稚園の三つの使命

長崎市文教町の一角にある長崎大学教育学部附属幼稚園。長崎大学文教キャンパスから徒歩十五分ほどの場所で、近隣には同附属の小・中学校も控えています。この地域は長崎市北部の中心地区である住吉にほど近く、生活や交通の利便性に恵まれた環境です。

本園は、明治十九年、長崎師範学校女子部に附属幼稚園として創立。その後、移転と改称を重ね昭和四十一年に現在の名称になりました。

創立以来、幼稚園教育の在り方について実践的研究を行い、その成果を発表してきた本園には、長崎大学教育学部の附属として次の三つの使命があります。

一、教育研究

長崎大学教育学部と附属小学校、附属中学校、附属養護学校、本園が連携し、教育理論と実践に関する研究並びにその実証的な研究を行っています。平成十六年度の研究テーマは、「学ぶ力へつながる幼児の知的好奇心を培うために～幼小連携をめざして～」です。

二、教育実習指導

教育学部学生の教育実習を計画し、毎年春と秋に教育実習生を受け入れ、その指導を行っています。

留学生の お国自慢 【タイ編】

Thailand

人も文化も魅力多彩な微笑みの国タイランド

Kingduean Somjit
ソムジット キンデュアンさん
長崎大学大学院生産科学研究科

東南アジアの中心に位置するタイ。国土は日本の一・四倍の広さで、人口は約六、三〇〇万人。年間の平均気温が二十九度という熱帯の国です。「タイは十三世紀から王制を維持しているんです」とソムジットさん。タイの人々は王室を非常に尊敬しています。

「国民の九十五％は仏教徒。どこに行っても燦然と輝く寺院があり、早朝には黄衣をまとった托鉢の僧侶に出会えます」。男子は一生に一度は仏門に入り修業するのが習わしです。

タイの仏教徒には、『シンハー』と呼ばれる五つのルールがあります。その内容は、一、生き物を殺さない。二、嘘をつかな

長崎大学教育学部附属幼稚園

〒852-8131
長崎市文教町4-23
TEL（095）819-2287
（095）819-2288
FAX（095）819-2289

◎ 附属幼稚園のホームページでは
子育ての悩み相談にも応じています。

http://www.edu.nagasaki-u.ac.jp/school/pre/

■長崎くんちの感動を「おくんちごっこ」で再現。園児たちは大にぎわい。

■ 傘ぼこ、コッコデショ、龍踊りなど、園児たちが段ボールや色紙などで作ります。

■秋恒例の楽しいイモ掘り。みんなで焼きイモにしていただきます。

■春には桜が満開となる並木道を元気に登園。

■ウサギやニワトリなどを飼育。えさやりや小屋掃除を年長児が当番活動で行います。

三、地域教育への協力

研究発表会、各種研究会、公開保育、研究協議会などを通して、長崎県教育委員会等の事業に協力するとともに、公・私立幼稚園並びに保育所の教育研究に協力しています。

一人ひとりの興味や関心を大切に

本園の建物は、園児たちが屋内から外へすぐに駆け出して遊べる平屋建て。約五、〇〇〇㎡のゆったりとした敷地には、運動場、プール、図書室兼総合保育室などの施設も充実しています。さらに四季折々の表情を楽しめる樹木や草花も各所に植えられ、毎年秋に園児たちが収穫を楽しむ小さなイモ畑もあります。

本園の教育目標は次のとおりです。

○心も身体も健康な子ども
○自主性があり、意志の強い子ども
○情操が豊かで、思いやりのある子ども
○社会性のある子ども
○創造性の豊かな子ども

本園では、遊びの中でこそ幼児が生きる力を獲得すると考え、遊びの時間を十分に確保。幼児にとって自然な生活の流れと、一人ひとりの興味や関心を大切にしています。

また、未就園児と保護者に園庭を開放し、子育ての悩みの相談に応じるなど地域の子育ての支援活動も積極的に行っています。

い。 三、性の犯罪に至ることをしない。四、万引きをしない。 五、飲酒をしない。「私たちはこれをできるだけ守るように、子どもの頃からしつけられます」。

ここ数年、日本でも人気を呼んでいるタイ料理。「ハーブや刺激的な香辛料をたっぷり使い、甘さ、辛さ、酸っぱさがからみ合った複雑な味わいが特長です」。最近では、その味つけに欠かせないナン・プラー（塩漬けにした魚を発酵させて作ったタイ独特の醤油）などの各種調味料も日本のスーパーで気軽に手に入るようになりました。料理上手のソムジットさんは、友人たちに何度も本場のタイ料理を作ってあげたそうです。世界三大スープのひとつとして有名な「トム・ヤム・クン」や、緑色の唐辛子とココナッツミルクの風味が絶妙な「グリーン・カレー」は特に好評だったそうです。

長崎大学では水産資源の有効利用について研究しているソムジットさん。帰国後はその成果を大いに活かしたいと笑顔で話します。美しい民族衣装で今回の取材に応じてくれた彼女は、まさに心優しきスマイル・タイランドの方でした。

いいたか放題

大学改革に求められるもの

シンプル イズ ベスト。ディスカッションよりもアクションを。

CHOHO • 16

紅葉に染まる京の街を歩いた。

京都は市民の十一人に一人が学生と聞きます。人口あたりの学生数は東京を凌駕して全国一だそうです。学びの風土といってもいいかも知れません。街は、そこで暮す人々がその歴史や文化、風土を創ります。

大学はどうでしょうか？そこで暮らす人々がその歴史や文化を創っているのでしょうか。教育と研究を通した次世代を担う人材の育成の場の改革が必要ならば、主役として、そこで学び、暮らす人々にフォーカスせねばなりません。

改革を阻むものは主役の不在。この一語に尽きます。彼らを改革の本陣に参画させるべきです。学生主導、学生参画の楽しい大学づくりです。美味しい学食づくり。楽しい、夢のある学内掲示。内外のベンチ、サロン、喫茶コーナーづくり、あるいは、教授が笑顔で迎えてくれる明るく清潔な研究室づくりなど、主人公であるべき彼らが活躍する場づくりを彼らの主導、参画のもとに推進していくこと。

改革には大上段に振りかぶった議論も高邁な理論も必要ありません。むしろ、弊害が大きいでしょう。旗振り役だけで組織変革が実現するはずがありません。大学だけが特別な場所ではないはずです。

シンプル イズ ベスト。ディスカッションよりもアクション。

「右に倣え」するよりも、部外者の参画を求めるよりも、語り合うべき、ともに考えるべきは、主役たちのはずです。

維新の志士は京の街を縦横に駆け抜けました。キャンパス狭しと学生が謳歌し闊歩するその先に、改革の芽生えがあるような気がしています。

ゆびとま
WELL COMMUNITY & HITECH VALUE

ゆびとま ホームページ
URL:http://www.yubitoma.co.jp/

「答えはいつも半歩先」(悠飛社)
小久保徳子著

“全国の同窓生たちをインターネットでつなげたい”。全国版同窓会サイト『この指とまれ!』の誕生の軌跡が記された本。強い意志を持って夢に向かう小久保氏の姿に勇気と希望がわいてきます。

(株)ゆびとま　代表取締役社長
小久保　徳子
NORIKO KOKUBO

1958年長崎県生まれ。高校を卒業後、コンピュータに関心を持ち情報処理専門学校へ。卒業と同時に長崎の企業にシステムエンジニアとして入社。90年、システム開発受託会社（有）ヌーベルバーグ設立。96年、コミュニティサイト『この指とまれ!』（通称"ゆびとま"）開設。会社を発展改組して、2000年（株）ゆびとまを設立し代表に就任。日経ウーマンオブザイヤー2001受賞。長崎大学経営協議会委員。

INFORMATION

入試情報

◎大学入試センター試験

日　時　1月15日（土）・16日（日）

◎前期日程試験

出願期間　1月24日（月）～2月2日（水）
試験実施日　2月25日（金）
※医学部医学科は2月26日（土）も実施する
合格発表　3月8日（火）
入学手続　3月14日（月）・15日（火）

◎後期日程試験

出願期間　1月24日（月）～2月2日（水）
試験実施日　3月12日（土）
合格発表　3月21日（月）
入学手続　3月26日（土）・27日（日）

卒業式

3 25 金

日　時　3月25日（金）10時
場　所　長崎ブリックホール

入学式

4 8 金

日　時　4月8日（金）10時
場　所　長崎ブリックホール

1 16 日

平成16年度日本学術会議九州・沖縄地区会議学術講演会

21世紀の日本と長崎の科学研究

～最前線の科学者から若者たちへ～

日本学術会議の主催による若い世代を対象にした講演会です。大学生はもちろん、中高生のみなさんも奮ってご参加ください。参加費は無料です。

日　時　1月16日（日）13時～17時10分
場　所　長崎大学医学部記念講堂
入場定員　400人程度
対　象　中学生、高校生、大学生、一般
講演内容

◎特別講演「日本のビジョンは?」　黒川　清（日本学術会議会長）

●講演 1「ムツゴロウの目から見た有明海」
●講演 2「熱帯における新しい脳炎ウイルスの発見」
●講演 3「地域教育のためのネットワーク型プロジェクト
～教育の曲がり角と大学の役割～」
●講演 4「医工連携による難病患者のための在宅介護支援の取り組み」
●講演 5「半世紀を経てなお持続する原爆の人体影響」
●総合討論

問い合わせ先　長崎大学総務部学術国際課
TEL：095−819−2039
E-mail：gakusai@ml.nagasaki-u.ac.jp

2 9 水 ▶ 23 水

ペリー来航150周年記念

「黒船とサムライ」画像展示会

日　時　2月9日（水）～23日（水）9時～18時
場　所　長崎市出島史跡ヘトル部屋（入場無料）

編集後記

明けましておめでとうございます。第10号では初心にかえって、写真や図などをできるだけ多く使った「わかりやすい」紙面を心がけました。編集委員の慣れや力みから、文字数の多い窮屈な紙面になっていたとの反省からです。

さて、今回の特集は「離島医療」です。これは、現代版「赤ひげ医師」の養成をめざす「地域と連携した実践型医学教育プログラム」として、平成16年度の文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（GP：Good Practice）」に採択されました。GPの採択は、平成15年度から合計3件です。その採択件数は、長崎大学の教育水準の高さをそのまま反映しているといえましょう。

地域との連携活動と同時に、長崎大学では、「国際化」を標榜するさまざまな活動が繰り広げられています。その中で、「国際医療協力」を長年にわたって行っている徳永瑞子教授にスポットを当てました。国際的な看護教育への熱意、人間同士のふれあいの重要性や温かみが、ほんわりと伝わってくることでしょう。

TEL 095-819-2014／FAX 095-819-2024
E-mail：www_admin@ml.nagasaki-u.ac.jp
■編集・発行◎長崎大学広報企画委員会（広報誌企画・編集専門部会）
■発行日◎2005年1月

PRINTED WITH SOY INK
古紙配合率70%再生紙を使用しています。

CHOHO
第10号アンケート

読者の皆様のご意見・ご要望をもとに、より充実したCHOHOを目指します。大変お手数ですが以下のアンケートにお答え下さい。ご回答はFAX（**095-819-2024**）でお願いします。
なお、E-mail(www_admin@ml.nagasaki-u.ac.jp)でも受け付けております。

長崎大学

◆年齢　　歳　　◆性別　　男・女

❶ 今回よかったコーナーに✓をつけて下さい。（複数回答可）

- □【特集】現代版「赤ひげ」を育てる 研究と教育の新しいフィールド しまへ。
- □【古写真・昭和ルネサンス】長崎大波止電車通り
- □【国際医療協力】国境を越えて支えあう命
- □【たかが食事されど食事】教育の原点は食にあり
- □【We Love Circle】よさこい部　突風
- □【長崎大学教育学部附属幼稚園】生きる力の基礎を育む
- □【留学生のお国自慢】タイ
- □【いいたか放題】（株）ゆびとま 代表取締役社長 小久保徳子さん
- □【インフォメーション】・【編集後記】

❷ 今回の内容はどうでしたか？✓をつけて下さい。

□やさしい　□ふつう　□少しむずかしい　□むずかしい　□わからない　／　□おもしろい　□ふつう　□つまらない

◎ご意見・ご感想をお書き下さい。

❸ 今後読んでみたいテーマなどありましたらご記入下さい。

◎ご自由にお書き下さい。

❹ CHOHOをどこでご覧になりましたか？

❺ その他、大学に対するご意見・ご要望がありましたらお聞かせ下さい。

◎ご自由にお書き下さい。

ご協力ありがとうございました！

長崎大学広報企画委員会（広報誌企画・編集専門部会）
〒852-8521 長崎市文教町1番14号　TEL 095-819-2014
E-mail : www_admin@ml.nagasaki-u.ac.jp